



木
把
圖
句
集
後
編





朱樹乃翁おもとを慕ひ
て風月花鳥乎星霜
移しつたこと二十餘年を皇
々季春のたし免つら病
床を訪ひ句集後編のあ
まじき事やとて翁の
たしぬた事やとてあはれと



病舌根をさ免と言語心か
ちのせきくまふさくこゝろは
よしたの手しとむとせし
ふれよあきり先見守の
句ともふ志るししつてこのし
置ぬきの類を翁の門人
秋舉七と七日の追福の日
師乃州稿を撰来里予と

俱尔をこの利き世り弘
めおつてもさくろゝ衆予も亦
同し意なるきを其よし
書くくてもろゝわたと守

于時文化九年申秋
曙葺尔筆をともて

青く所 卓池

枇杷園句集後編卷之一

春

元日雪

入るる雪の春の面よ雪の松

七十の歳をむくして

月雪の春の春の春

贈青阿坊

洛の雙林寺に法師青阿と臘月乃



文乃三まふや二十四日都をこもち出て大和
路より香をきくもよくをねぬ山ふさるる日を
見よふ人ふよしついに能ん發句して見せ
しよんといひこしつねをとおめこして
寅正月元日試筆

舟の泊瀬うてやよし船の花の春

梅

子のやうるう急ぐ能く梅の花

櫻苔の艸木ももきさ少梅のふ
う気、香やいつく大艸の奈木をこ
荒磯やふたきうけこめれを

菅神影前詠梅花

天満る香や何となくとう気の花

月艸庵より在ふく

心ら琵琶湖上よりかふ

梅の香や明日か新ら志賀の山

熱田踏歌

夜ふくはうき日みか柳をたふさふ

題しらす

うき柳をたふさふ一里を 替の柳

厚かものつゝか旅まきの畠おは

猿曳のさめおのつゝまある柳の南

鶯

いにしやふるきまをうらむきよきゆるのま

里ふりてうらむきよきゆる木間の南

箱根山

うらむきゆるきよきゆるをて高音うら

うらむきゆるきよきゆるよ日ふか交に度

かゝうして学竹ふきまのしらす

題鶯水滴

うらむきゆるきよきゆるを水一斗

曉臺先生一周忌

寛政四年正月廿日曉臺六人うしやぬこ都
四條のちやをすつた寺院とつたあまそふ
葬るとすくたつちやまいはまきの國古のいぢ
お洞仙寺と父母の墓所をあやう側か大人の
名中ひやうを瘞してこのよとくお塚を築
お追慕の記念とすをいそつたあまそふ
ふしやうをいそつたあまそふ
おとけもいそつたあまそふ

何れとすくたつちやまいはまきの國古のいぢ
りやうつ日ふ其塚を築してつたあまそふ
おとけもいそつたあまそふ
はつちやまいはまきの國古のいぢ
ふしやうをいそつたあまそふ
おとけもいそつたあまそふ
中へふ驚かすに都邊の人とすくたつちやまい
かまきもたすくたつちやまいはまきの國古のいぢ
ふしやうをいそつたあまそふ

刀よちやな春や都の草は露
柙

柳青し雪ふやいく日のさきを絶し
一村く川汲よあま柙うす

若菜

鶏の子は五りけり菜の畠道

春雪

けり芝や窪くゆく候もぬる雪

鈴鹿山

雪すし一羽雨くふまかふと鈴鹿山

若艸

けり艸やと少けり社を庵の鍵
朝のつるをみる誰か子そ春の字

瀬戸素剛雀園記

雀のちみくときをゆるし素剛耳をハ
さしゆくゆきをひやりぬるのまらふ人の

西の小坂をくぐるよし今こころいふ
そ米洗ふ小菘つめし
あもしくて檐外ふあて
驚て箒とる
庵の名を雀園と
とらふ

雉

雛月や塘はうれはな

雨そぬくま
ふら草や雉子のけこむ人乃家

朧月

籠より社も朧月のはうら

出代

出らり少やあはの芦を片こ
真赤いを男もりな

舟人能ひと

二月

大空の青のひよふまに二月の春
如月や八日の底にたぐ子香

春夜

春夜に花とさるる夜のほろもみ

紅梅

紅梅のあきり猫の伸く入る

春雨

春るや油のちちく宵のやま

帰雁

帰雁よて居啼 芦乃ニ系ぐ那

凡月の友を失ふるを数いそをちくそや
う北西行上人の骨おて人を作りまふい
あゆ人をうつしるあひまん決の花ささる
あきく啼て野道の色のどめく日
あきく少ふあきくいりあきくあきぬ

人の骨は芽と出ぬもけり春風
寄居虫

かられ来て月も雲居虫のやよりか

病後二句

手車ふ繋て出うれらるるの月
ひよひ脱ぬ来兩らけり衣

寢覺里

春月 祐さ危の里を通りくさ

少年行

と教の舟駒のかけらをちりへさ

菜花

たのむや志賀の山越いくに里

涅槃

藪寺や蟹のあきつぬ涅槃像

燕

錫杖よりあきつぬ便軒のつそめりか

桃

夜何うやや桃さく門乃砂を

壽老讚

何れその子とせら桃の一と

上巳

山のふりふの軒何少籬の家

送羅城法師松島行脚

負ちれくろ夫芝坊といふ人何と今をサ

季をみ少むしつ尾張の國ふらふ

て三とせうも交り抱ひぬ國ふ歸り

後と折ぶうよりつ傳る文とや

とよます然るを去季の冬去きし

息して我この羅法師松島よ

とひひこそぬ子もとも

金の鳥さうめはす額乃浪か

おととと老衰せ少然くは余の

對面せしとひおんかみしやふゆのらんれとすい
さるるふあまをえくく候羅法師とて
おあふ旅立のよきしおむせしれは
一日枇杷園も益をとりてわづれの言
をばりてし

いもおくすくすの二つなとむ
花と梅さくら外よあましく松島の松の
おあつなと月雪のくくあまかみ

季の月やして大芝坊くあま余を

花

あまおれり孫抱くわづれ
くくくくくくくくくくく

午窓三回忌

かきかきかきかきかきかき

七言

朝の間やを思うくくくく

あま曇る晴るも雲のあはれひなま

梅間亭

あま曇るあま人のさくらを木間よま

長良里

つみもむらひもふあはれはる鶉籠る

樹下三宿のさくら葉おほくうてしりふは

閑をむらむる芭蕉翁のなごりもみ木

因らむうらむりうらむらや多渡の山踏走と

藤浪の里ふか入歌

樂ををるふゆくむの旅寐のむ

あはれいへをらちひるをくといふ

蕉翁乃句を自得して

色も香もたうてをらぬ眼鼻うか

き里やふの名跡を埒うなく

馬殿山

お川や海もふらうくやふさう

花より家社をふふなきむら鳥ふやとて
梅のふ鳥ふあき鳥ふあ社をらとをれ不宿
うたかた人よもあ社人よもあ社ふもあ社ふ
香をふあき人あ社むうー西上人のせの國
ホーふく山ふふ所ふはきくーいふふふふ
折ふふふふふふふふふふふふふふふふ
さくらも紫の菴も折ふ社もをふあ社
人よもあき鳥ふふあ社とて文ねふあふらふて

凡月や下らよあふてとてれもき
更科や〜ひとああああ田毎あああ
石山や〜人のあああ湖あああ〜あ不
破、明石、ふらみと〜燈の山あ〜あ山
あ社もあ月花のああああああああああ
あああ四時をあああ光陰ハ夫のああ〜申え
のあ〜ぬを月をふふあえよ

永日

屋根艸小鶏のふく日らふりし

呼子鳥

柴の戸や扉してよるおを鳴りて

得芝の家側小西行堂を

建てるをよけこひて

木瓜躰踏せりあのましま菴うふ

久米路の橋らかの虫をうぬ

あつちしてゆけとこひ

山あふり久米路の橋らかの虫をうぬ

蛙

棚をーやひよく艸りうく蛙

藁火焚をひよくとある蛙うふ

笠寺やうをりうぬおのぬきむら

田螺

あつちをうぬをうぬ田うぬ住居

小町譜

上

上

懐しのこころ故人々付ふくは

暮春

明日何ゆといふ日も春の名残うふ

本居大人弥生の暇日こは

伊勢のよへ帰るよを送て

松坂の松了る春のこころを祀

暇日孔委や灯の申く浦乃山

枇杷園句集後編卷之二

夏

甲花

卯のふり抜串をさよる垣根うら

若葉

柿核の壁りてえくるけり繁く菊

子規

何少明もささるけりおほきん

石とくもよ 頃啼や 表明の 飯の泡
木曾川

川舩やあゝへ 舩ゝゝ 河ゝゝあす

酔歩

やゝゝあす 啼りゝゝを 阿弥陀竺

鶯亭訪々歌歌

氣うけさよるゝゝあす 宵のゝと

無常菩提の種をゝゝゝ江口の遊女

草のなゝゝひ 吊ひさる 岳輅羅城少汝れ
之法師をゝゝゝ

世をいゝゝゝ江口のゝゝあす

一雙青眼見山見海

耳ゝゝゝかゝゝゝあすあす

竹子

竹子やゝゝ 四三尺とまのゝゝ

伊勢の神宮小詣り

世竹里棠よりおくら歌

真丸より神馬の肥る四月の暮
こめゆら黄より蚊屋ら萌黄唯そのか
らぬをよ〜といへは帰る法師泪を〜ひ
ぬ法師名ハ芸門信州諏訪の人俳諧より
拵〜予々松把園より宿を〜おれかせ〜
あ〜路お〜〜せれハか少〜も〜ちやまけ
〜

い川来ても故屋ら萌黄よ月夜う系

閑呼鳥

〜〜〜てま〜〜〜あ〜〜系
友り〜たお〜

庵のもの分て喰う拵うん〜

百合

百合の香の衣を〜白を山路う
系中将實方々の墓よ〜枯野お〜

うらふそ思ふと西行の旅ら秋一芒を
みちおくの伝宮一束お坊とりて業を
結せておくる秋なる

夏草てももさむいふうささおきさる哉

夏草

夏草や一際何事と何系松

蚊

蚊とりや酔人の足り新日さし

瀬戸山より在て三時既ふして帰路ふつく
雷を月雨のうちふと流る山川乃水聲
前後をせむ行先の川に只こゝ流るひま
かゝりして夫田川をワタれ夕陽をひま
照して中野蕭々多し

茨の葉さよふや胡てふのいのち際

苔花

灯とほまやきりきり流るを苔の葉

と里て山川氏す少おらるるまゝを湯入乃
人おらるるまゝと里てられしうらふ奥じ
之をを

日のおやあやめまゝを驚きの流
六日榊原う少もおらるる出る向溪路曲る水
聲人後を奪てゆわたりをこー松何る
岩根ふ立ち

撫子すし息吹ける雨間う都

張良瀬

雨もまゝとらるるも奇なり少橋の上

長野峠

紫陽花を日の入る伊賀の境に

猿蓑塚

一——れまゝや五月の雨お中
陽炎高しお佛のうし流るる岩屋何少
大ある不動尊を彫附しうらふあらしをく纏を

もろせりあつてしつれは降るて
ぬきまゝにして又さうせまふ

郭公なくやふ動の序ようは

夏野

牛馬より一筋あれる夏野うら

若竹

茶を酔てわの竹藪の掃除を

餞・巢居

去年の夏別一人のあつて又帰来て
あつてふくのれんとすまゝいつもの夏
相見んや水の存鏡のうけもうつらむを
又あふまゝと悲しうのあつてははふの
一夜と子金あつと数きして

あつたを明すてふうハ夏は月

水鶏

西風や水鶏啼寂のうらみの急

やめさく水 鶴又えさきさくしつ

五月雨

さくさく秋より南天のさきおくるこころ

五月雨や折すもさるあやめ州

照射

折角と消くも照射と何ぞさく

鶉飼

おろしよの鶉船すのさく煙さ

かき消てふいと鶉のさくさく

寛政戊午六月九日の日美濃路を經て

木曾ふ入ぬさくを言ひ籠といふ其ゆへ先を

妻籠といふといふいふいふいふいふいふ

いふいふを行きて木曾の坂といふいふ

つこいといふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふ

向ふ石坂路を旅人のつらき下るをいふ
玉草の葉のちるいふをいふ
いふをいふいふいふいふいふいふ
人も樹のいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ
者ともう葉の葉の形いふものふ火をい
ていふ煙をいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ

蟬
壁 へりていふいふいふいふいふ
蟬の音

一睡夢裏精神千里をたす

寐らぬ一宵明るも蚤須戸の蠅

目さぬうけハ

いんきんり蠅ら行らぬ蚊の夕

芒棧

ひとりの寐起きぬるもな寐草うらふ梅の
白ひ芳しき黄昏の月籠るぬちと花の
おとろしきとあはす石のくくくくくく

を寐草うらふて愛つるあきと人青ちく先
生とあはぬ夏と枝葉打つてあはして日を
透さす暑を凌ぐふ便り少秋ら名のおお
きハ黄葉をわしとら雪の舞いこみ光
く少枯るぬ枝を爪折て粥を煮る只くは
樹をく寝生をわしとら枇杷園より此真下へ
くく寝るも芒生ひ五月雨さし降そひて足お
あし止もぬく又くくくくくくくくくく

えまのむと酒小孩ニ平文ひひり出ー枯魚
一匹灰ふらくして志をー奥小入ぬ

そ風うけをそまふれ日たさ

蓮

蓮の香や人も何うらぬ苔のを
素堂不言や蓮を痴人を照すを

清水

清水汲て小木曾の蠅をワきれ

桂五亭夕貞見

夕顔やまゝの友

夕立

申ふらち黒はの梢ふまうし

夕くらちや響賣るる膳所町

雨ちり墨ぬらちのまをワる國のた

り子不伯母のろ餅と乾夕立のまぬた

ふらちひれを

雨乞巾 晴も 伊吹も ぬれり 雨

得鏡一字

採ちのた 影をありけむうらふか

浄後

男ふさるる 芦をよおて 後のか



